

Title	現代日本における権威主義的パーソナリティとソーシャル・キャピタル：どのようなソーシャル・キャピタルが高い・低い権威主義的パーソナリティと関連があるのか
Author(s)	崔, 煌
Citation	年報人間科学. 2024, 45, p. 81-95
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94578
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〈論文〉

現代日本における権威主義的パーソナリティとソーシャル・キャピタル——どのようなソーシャル・キャピタルが高い・低い権威主義的パーソナリティと関連があるのか

崔 煌

要旨

本稿の目的は、現代日本においてソーシャル・キャピタルは権威主義的パーソナリティとどのような関連があるのかを明らかにすることである。先行研究から権威主義的パーソナリティに影響を与える要因として学歴、職業、家族などが指摘されてきたが、ソーシャル・キャピタルとの関連についての研究はまだ少ない。そこで本稿では、全国調査データを用いて多変量解析（因子分析、重回帰分析、媒介分析）を行い、結束型ソーシャル・キャピタル（以下、結束型SC）と橋渡し型ソーシャル・キャピタル（以下、橋渡し型SC）の二種類のソーシャル・キャピタルと権威主義的パーソナリティの関連を確認した。その結果、親しい人の数の多さは権威主義的パーソナリティと負の関連があること、近所：きずなと一般的信頼、個別的信頼の高さは正の関連があることが明らかになった。また、競争不安と権威主義的パーソナリティにおける一般的信頼の間接効果を確認するため、媒介分析を行った結果、一般的信頼を経由した負の間接効果が存在することが確認された。以上の結果より、結束型SCが高い人ほど権威主義的パーソナリティが強いことが示され、特に橋渡しSCの場合、親しい人の数が多いほど権威主義的パーソナリティが弱い、一般的信頼が高いほど権威主義的パーソナリティが強いことから、橋渡しSCの中でも権威主義的パーソナリティとの関連において多様性が見られることが確認された。それに加え、媒介分析からは競争不安が一般的信頼を低下させることによって、権威主義的パーソナリティを引き下げる可能性が示唆された。

キーワード

権威主義的パーソナリティ、ソーシャル・キャピタル、競争不安、多変量解析

1. はじめに

権威主義的パーソナリティに関する研究が始まったのは枢軸国であったナチスドイツとイタリア王国においてみられる外国人と性的少数者への差別傾向が権威主義的パーソナリティによるものである可能性が指摘されたからである。

弘文堂の『社会学事典』（田中1988a, 1988b：260-261）によると、権威主義は社会的事実を、その固有の内在的価値によってではなくて、外在的な権力や威信の文脈のなかで評価したり、意味づけをしようとする視座構造と定義され、権威主義の視座構造をうけいれやすい人々のパーソナリティの構造を権威主

義的パーソナリティとよぶ。

権威主義的パーソナリティは権威主義的伝統主義と集団同調性、自己確信性に分類される。まず、権威主義的伝統主義は伝統的権威を中心とした権威のあるひと、ものへの服従、逸脱者への攻撃の態度を指し、集団同調性は親戚、友人、自分の帰依する宗教団体、社会全体、以上の四つの所属集団と自分自身の考え方が一致することを、また、自己確信性は自分自身の能力、自己像、考え方に対する肯定的側面を意味する（吉川 1992）。

そのような権威主義的パーソナリティを計る尺度として最初に提案されたものはアドルノによるF尺度である（Adorno ほか 1950）。しかし、後にF尺度は信頼度と妥当性の面において批判され、F尺度の中で権威主義的服従、権威主義的攻撃と因習主義で権威主義的パーソナリティを計る右翼権威主義尺度（Right-Wing Authoritarianism Scale）が開発され（Altemeyer 1981）、今では研究者によって多用されている。

初期の権威主義的パーソナリティ研究は権威主義を発生させる性格が存在すると考え、そのような性格を構成する要素を明らかにすることを目的としていた。しかし、権威主義的パーソナリティの研究が進むにつれ、社会・経済的要因と権威主義的パーソナリティの関連が確認されるようになった。その結果、権威主義的パーソナリティは単なる性格ではなく、ある個人が持っている、社会に対する考え方・態度であることが判明された。

日本においても第二次世界大戦における枢軸国としての特殊な歴史的経験から権威主義的パーソナリティに関連する数多くの研究がなされてきた。そこで、今まで行われた日本における権威主義的パーソナリティの研究を三つに分類することができる。まず、第一は権威主義態度の構成要素に関する研究である。次の第二は独立変数としての権威主義的パーソナリティの研究で、権威主義態度によって影響されるものに関する研究である。最後の第三は従属変数としての権威主義的パーソナリティの研究で、権威主義態度に影響を与える要因に関する研究である。

特に第三の研究から年齢、学歴、職業威信、家族構成、競争不安・閉塞感が日本における権威主義的パーソナリティと関連があることが明らかになったが、ソーシャル・キャピタルと権威主義的パーソナリティにおいてどのような関連があるのかについて確認した研究は数少ない。

今までのソーシャル・キャピタル研究からソーシャル・キャピタルがもたらす肯定的な機能が指摘されている。ソーシャル・キャピタルが役割を果たす分野として、①企業を中心とした経済活動、②地域社会の安定、③国民の福祉・健康、④教育、⑤政府の効率が挙げられる。特に②の地域社会の安定においてソーシャル・キャピタルは地域住民同士の一体感を醸成し、犯罪を抑止することが指摘される（稲葉 2011：41、49-53）。

しかし、ソーシャル・キャピタルには肯定的な役割のみならず、社会における寛容度を下げ、村八分に繋がりがやすいといった否定的な側面が存在することも同時に指摘されている（稲葉 2011：161-162）。権威主義が権威への服従と攻撃傾向を含んでいることを考えると、ソーシャル・キャピタルは権威主義的パーソナリティと肯定的な関連がある可能性が存在する。

本稿の目的は、現代日本において権威主義的パーソナリティとソーシャル・キャピタルにどのような関

連があるのか、とりわけ権威主義的パーソナリティを強化させる・緩和させるソーシャル・キャピタルは何かを明らかにすることである。それを確認するために権威主義的パーソナリティとソーシャル・キャピタルが調べられた全国調査データを用いた計量分析を行う。はじめに、因子分析を行い、四つの権威主義的パーソナリティによる権威主義的パーソナリティの因子を抽出する。次の相関分析では後に紹介する五つのソーシャル・キャピタルと因子分析から得られた権威主義的パーソナリティの因子の関連を確認する。さらに因子分析から得られた権威主義的パーソナリティの因子を従属変数、ソーシャル・キャピタルを独立変数とした重回帰分析を行い、権威主義的パーソナリティとソーシャル・キャピタル関連を確認する。最後に、橋渡しSCである一般的信頼を媒介変数として、競争不安と権威主義的パーソナリティにおける三者間の関連を確認する。

2. 先行研究と分析課題

2.1 先行研究

権威主義的パーソナリティに影響を与える要因に関する先行研究は大きく遺伝的・先天的な要因に着目する研究と心理社会的・後天的な要因に着目する研究に分類される（敷島 2004）。そこで、本稿では主に後者の心理社会的要因が権威主義的パーソナリティに与える影響を中心に議論を進めていきたい。

権威主義的パーソナリティに影響を与える第一の要因として、職業階層が挙げられる。吉川（1992）は権威主義的パーソナリティと職業階層に関する日本国内外の先行研究を紹介した後、「仕事とパーソナリティ研究」データを分析して、自己確信性と職業階層との関連、即ち職業階層が低いほど自己確信性が強いことを確認した。しかし、その後の調査から95年のSSM調査に比べ、2005年のSSP調査における権威主義的パーソナリティと職業階層の関連の弱まりが明らかになった（吉川 2014）。

第二の要因は教育である。吉川（1992）による分析から権威主義的伝統主義と学歴との関連が認められ、学歴が低いほど、権威主義的伝統主義の傾向があることが確認された。そのような学歴との関連は後の研究においても確認され（吉川 2014）、近年の研究から非大卒男性（濱田 2019）、文系学部卒男性（渡辺 2017）において強い権威主義的パーソナリティの傾向があることが指摘されている。

第三の要因は家族である。例えば、日本の研究からも家族関係と権威主義的パーソナリティの関連が指摘されてきた。直井（1986）は夫の親と同居する主婦であるほど、そうではない主婦に比べ、権威主義的であることを明らかにした。しかし、青少年の権威主義的パーソナリティに対する家族による効果はそれほど強くないことも指摘されている（吉川 1996）。

第四の要因は心理状態である。濱田（2019）の研究から競争不安と閉塞感を感じるほど権威主義的パーソナリティが強いことが示され、人の心理状態が権威主義的パーソナリティの強化と関連があることが確認された。

2.2 先行研究の課題

以上の先行研究から、権威主義的パーソナリティは低い教育水準と競争不安・閉塞感と関連があることが分かった。近年においてはソーシャル・キャピタルと権威主義的パーソナリティを強化・緩和させる可能性が指摘されているが、両者の関連性を確認した研究はまだ多くはない。そこで、ソーシャル・キャピタルの定義と類型についての話をまとめた後、ソーシャル・キャピタルが権威主義的パーソナリティをどのように強化・緩和させることができるのかについて話を進めていきたい。

ソーシャル・キャピタルは人々の間の協調的な行動を促す「信頼」「互酬性の規範」「ネットワーク」で（稲葉 2011：1）あり、個人的・構造的側面と集合的・認知的側面に分けられる（Portes 2000；Harpham 2008）。

まず、個人的・構造的側面は社会的接触・ネットワークを、集合的・認知的側面は社会的結束・社会的資源に対する主観的認知を含める。そこで、集合的・認知的側面に当たる信頼は一般的信頼と個別的信頼に分類され、一般的信頼とは人間一般に対する信頼を、個別的信頼は特定対象に対する信頼を意味する。

また、ソーシャル・キャピタルを結束型SCと橋渡しSCに区分する方法がある。結束型SCは大学の同窓会、地縁にもとづく組織など同質な者同士を結びつけるソーシャル・キャピタルで、橋渡しSCは被災地支援のためのボランティア団体といった異質な者同士を結びつくソーシャル・キャピタルである。

近年の研究からソーシャル・キャピタルがもたらす肯定的な役割が明らかになった。例えば、結束型SCは人々に所属感を与え、市民参加を促し、地域社会の安定といった肯定的な役割を果たすが、その一方で、社会における寛容度を下げ、村八分につながりやすいといった否定的な側面も指摘されている（稲葉 2011：161-162）。

そのようなソーシャル・キャピタルの否定的な役割は排外主義の研究において議論が進められている。例えば、辻（2008）は友人の多さや一般的信頼の高さとナショナル・プライドや愛国心の高さと関連があることを示した。そのため、地域社会における隣人同士の信頼が高い人は地域内における伝統や規範、秩序を守らない人に対し、不寛容となり、それが権威主義的パーソナリティにつながる可能性が存在する。

一方、異質なものを結びつける橋渡し型SCは本人と異なる価値観をもつ人と接する機会をもたすことによって、権威主義的パーソナリティを緩和させる可能性が存在する。すでに述べた排外主義の研究によって提唱された接触仮説（Contact Theory）によれば、異なる人種、民族集団など外集団との接触経験は外集団に対する偏見や排外意識を低めるとする。実際、接触仮説の是非に関する研究が進められ、日本において外国人の個人的な接触と排外主義や偏見との負の関連が確認された（大槻 2006；伊藤 2011）。

例えば、大槻（2006）はあいさつを交わすことや、生活する地域において外国人を見かけるような間接的な接触でも外国人の受け入れに肯定的であることを明らかにし、伊藤（2011）は外国人と「あいさつなど軽く言葉を回したことがある」「同じ職場で一緒に働いたことがある」「同じ職場で一緒に働いたことがある」といった外国人との接触が外国人に対する抵抗感と負の関連があることが示した。また、外国人との接触頻度が低いほど排外主義的である結果は金（2015）による研究からも確認された。

外国人との接触のみならず、橋渡し型SCにおいても排外主義との負の関連が指摘され（米良 2020）、

他者一般への信頼を意味する一般的信頼が高いほど排外主義的態度が弱いという研究結果も発表されており（金 2015）、一般的信頼が高い人は他者を信用するため、一般的信頼が低いものに比べ、困難な時に権威のあるものに依存する必要性をあまり感じず、権威主義的パーソナリティを緩和させると考えられる。

そこで、外国人との接触が偏見や排外主義を低めるとする接触仮説は権威主義的パーソナリティにも適用でき、橋渡し型SCによって、本人と異なる価値観をもつものとの接触機会が高いものはそうではないものに比べ、より多様な価値観をもつ人との接触経験が得られ、また、それによって拡張された信頼は権威主義的パーソナリティを緩和させる可能性が存在する。

また、競争不安と関連して、競争不安を感じる人ほど、周囲を競争者と認識することによって、他者に対する一般的信頼が低く、一般的信頼が低いほど、政治家や知識人など、権威のある人を信頼することにより、権威主義的パーソナリティを高める可能性が存在する。

以上、先行研究から得た知見をもとに本稿では以下の七つの仮説をもとに分析を行う。

仮説1.1 親しい人の数が多いほど、権威主義的パーソナリティが低い

仮説1.2 一般的信頼が高いほど、権威主義的パーソナリティが低い

仮説2.1 近所：サポートが高いほど、権威主義的パーソナリティが高い

仮説2.2 近所：きずなが高いほど、権威主義的パーソナリティが高い

仮説2.3 個別的信頼が高いほど、権威主義的パーソナリティが高い

仮説3.1 競争不安が高いほど、一般的信頼が低い

仮説3.2 競争不安は一般的信頼を経由して権威主義的パーソナリティを高める

3. 方法

3.1 データ

本稿では、2022年1月～3月に実施された「2022年階層と社会意識全国調査（SSP2022）（訪問面接調査）」によるデータを用いた。有効回収数は2395、有効回収率34.73%である。SSP2022調査の対象地域は一部の島嶼部等を除く日本全国であり、選挙人名簿による層化二段無作為抽出によって標本が抽出された。分析対象者は全国の20から64歳までの男女であり、欠損（無回答・回答不備）がないケースである1797人の変数を使用した（小林&前田 2023）。

3.2 変数

表1は、分析で用いた従属変数の度数分布である。本稿では「権威主義的パーソナリティ」を構成する四つの変数、即ち「権威のある人々にはつねに敬意を払わなければならない」「以前からなされていたやり方を守ることが、最上の結果を生む」「伝統や習慣にしたがったやり方に疑問を持つ人は、結局は問題

表 1. 従属変数の基礎統計量

変数	詳細	範囲	平均	標準偏差
権威のある人々にはつねに敬意を払わなければならない	そう思わない：1、どちらかといえばそう思わない：2、 どちらともいえない：3、どちらかといえばそう思う：4、 そう思う：5	1-5	2.38	1.07
以前からなされていたやり方を守ることが、最上の結果を生む			2.09	0.96
伝統や慣習にしたがったやり方に疑問を持つ人は、結局は問題をひきおこすことになる			2.37	1.02
この複雑な世の中で何をなすべきかを知る一番よい方法は、指導者や専門家に頼ることである			2.71	1.02

(注) N=1797

をひきおこすことになる」「この複雑な世の中をなすべきかを知る一番よい方法は、指導者や専門家に頼ることである」を用いる。上記の四つの項目は権威主義的伝統主義を問う項目で、権威主義的伝統主義とは伝統的権威を中心とした権威のあるひと、ものへの服従、逸脱者への攻撃の態度を意味するものである(吉川 1992)。

そこで、「この複雑な世の中で何をなすべきかを知る一番よい方法は、指導者や専門家に頼ることである」の平均値が2.71で最も高く、「以前からなされていたやり方を守ることが、最上の結果を生む」の平均値が2.09で最も低かった。一方、「権威のある人々にはつねに敬意を払わなければならない」「伝統や慣習にしたがったやり方に疑問を持つ人は、結局は問題をひきおこすことになる」の平均値は各々2.38と2.37であった。

表2は独立変数の記述統計量を表している。独立変数は親しい人の数、近所の人たちは手助けしてくれる)、近所：きずな(近所の人たちは強いきずなで結ばれている)、一般的信頼(たいていのひとは信頼できる)、個別的信頼(何をするにしても、知らない人より、よく知った人の方が信頼できる)である。そこで、本稿では親しい人の数と一般的信頼を橋渡し型SCと、近所：サポートと近所：きずな、個別的信頼を結束型SCと定義する。

また、先行研究に従い(吉川 1998；吉川 2014；濱田 2017)、性別、年齢、学歴、職業、配偶者の有無、主観的健康感、親しい家族・親族の数、競争不安、閉塞感を統制変数として投入した。

表 2. 独立変数の記述統計量

変数	詳細	範囲	平均、割合	標準偏差
年齢	歳	25-64	46.88	10.48
世帯収入(代数変換)	円	0-8.52	6.40	0.78
主観的健康感	わるい：1、あまりよくない：2 ふつう：3、まあよい：4、よい：5	1-5	3.45	1.03
親しい家族・親族の数	人数	0-100	2.36	3.24
親しい人の数	人数	0-100	4.78	5.26
近所：サポート(困っているとき、近所の人たちは手助けしてくれる)	まったくそう思わない：1、そう思わない：2、 どちらともいえない：3、そう思う：4、 とても思う：5		2.84	1.08
近所：きずな(近所の人たちは強いきずなで結ばれている)			2.29	0.99
一般的信頼(たいていのひとは信頼できる)	まったくあてはまらない：1、あまりあてはまらない：2、 よくあてはまる：5		3.07	0.90
個別的信頼(何をするにしても、知らない人より、よく知った人の方が信頼できる)	どちらともいえない：3、ややあてはまる：4、 よくあてはまる：5	1-5	3.86	0.84
まごまごしていると、他人に追い越されそうな不安を感じる	そう思わない：1、あまりそう思わない：2、 どちらともいえない：3、ややそう思う：4、 そう思う：5		2.63	1.08
本人の社会的地位は、家庭の豊かさや親の社会的地位で決まっている			3.20	1.09
性別	男性：0、女性：1	0-1	男性：49.2% 女性：50.8%	
学歴	義務教育：1、高等学校：2、短大・大学以上：3	1-3	義務教育：2.4%、高等学校：42%、短大・大学以上：55.6%	
配偶者	配偶者あり：1、配偶者なし：0	0-1	配偶者あり：73.1%、配偶者なし：26.9%	
職業	専門：1、管理：2、事務：3、販売：4、 マニユアル：5、農業：6、無職：7	1-7	専門：19.3%、管理：10.2%、事務：22.1%、販売：9.8%、マニユアル：25.7%、農業：1.3%、無職：11.2%	
都市規模	都市(町村)：1、人口10万未満市部：2 人口10万人以上市部：3、中核市・特別市：4、区部：5	1-5	都市(町村)：7.1%、人口10万未満市部：19.0% 人口10万人以上市部：18.5%、中核市・特別市：25.0%、 区部：30.4%	

(注) N=1797

3.3 分析方法

本稿では統計分析ソフトウェアであるSPSS28を使用して、平均値、標準偏差といった記述統計を算出し、

その後、SCと権威主義的パーソナリティの関連を検討した。

具体的には、五つのSCを独立変数、権威主義的パーソナリティを従属変数とし、7つの変数を統制変数として投入した重回帰分析を行った。その際、多重共線性は発生しないことが確認された。

また、競争不安と一般的信頼、権威主義的パーソナリティの関連を明らかにするため、SPSSのProcess MACRO (Hayes 2018) のMODEL4を用いて一般的信頼を媒介した間接効果を検証した。その際、ブートストラップ法による反復抽出は5000回であり、信頼区間 (confidence interval: CI) は95%であった。

4. 分析結果

4.1 因子分析

表3は「権威主義的パーソナリティ」を構成する四つの変数を因子分析した結果である。因子分析の方法は主因子法である。「権威主義的パーソナリティ」を構成する「権威のある人々にはつねに敬意を払わなければならない」「以前からなされていたやり方を守ることが、最上の結果を生む」「伝統や習慣にしたがったやり方に疑問を持つ人は、結局は問題をひきおこすことになる」「この複雑な世の中をなすべきかを知る一番よい方法は、指導者や専門家に頼ることである」の因子負荷量は各々0.508、0.781、0.632、0.523であり、全て0.5を超えている。そこで、ここから得られた権威主義的パーソナリティの因子を従属変数として次の相関分析と重回帰分析を行う。

表 3. 因子分析

権威主義的パーソナリティ	因子負荷量
権威のある人々にはつねに敬意を払わなければならない	0.508
以前からなされていたやり方を守ることが、最上の結果を生む	0.781
伝統や習慣にしたがったやり方に疑問を持つ人は、結局は問題をひきおこすことになる	0.632
この複雑な世の中を何をするべきかを知る一番よい方法は、指導者や専門家に頼ることである	0.523

注) 主因子法, N=1797

4.2 相関分析

表4は「権威主義的パーソナリティ因子」と五つのソーシャル・キャピタルの間の相関係数を求めたものを表としてあらわしたものである。まず、権威主義的パーソナリティと近所：サポート、近所：きずな、

表 4. 権威主義的パーソナリティ因子とソーシャル・キャピタルの相関係数

	権威主義的 パーソナリティ 因子	親しい人の数	近所：サポート	近所：きずな	一般的信頼	個別的信頼
権威主義的パーソナリティ因子	1.000					
親しい人の数	-0.140	1.000				
近所：サポート	0.081 **	0.159 **	1.000			
近所：きずな	0.123 **	0.175 **	0.742 **	1.000		
一般的信頼	0.137 **	0.105 **	0.279 **	0.262 **	1.000	
個別的信頼	0.135 **	0.062 **	0.106 **	0.064 **	0.302 **	1.000

注) **p<.01, *p<.05, N=1797

一般的信頼、個別的信頼の間における正の相関関係が見られることが確認された。次に親しい人の数は近所：サポート、近所：きずな、一般的信頼、個別的信頼と正の相関関係が、近所：サポートは近所：きずな、一般的信頼、個別的信頼と正の相関関係が、近所：きずなは一般的信頼と個別的信頼と、一般的信頼は個別的信頼と正の相関関係が示された。

4.3 重回帰分析

本稿ではソーシャル・キャピタルと権威主義的パーソナリティの関連を明らかにするために、重回帰分析を行う。分析の際には、表2の因子分析によって得られた権威主義的パーソナリティの因子を従属変数とし、独立変数として二つの橋渡しSCと三つの結束型SCを投入した。そこで、分析では四つのモデルに分けて各々のソーシャル・キャピタルによる効果とすべてのソーシャル・キャピタルを投入した際における効果を確認する。表5はその結果を示したものである。

表 5. 重回帰分析

従属変数：権威主義的パーソナリティ												
	モデル1			モデル2			モデル3			モデル4		
	B	S.E.	β	B	S.E.	β	B	S.E.	β	B	S.E.	β
切片	0.14	0.30		-0.08	0.30		-0.46	0.30		-0.55	0.305	
年齢	0.00	0.00	-0.02	0.00	0.00	-0.04	0.00	0.00	-0.04	0.00	0.002	-0.05
性別(0:男性)	0.02	0.04	0.01	0.01	0.04	0.01	0.03	0.04	0.02	0.02	0.042	0.01
学歴	-0.16 ***	0.04	-0.10	-0.16 ***	0.04	-0.10	-0.18 ***	0.04	-0.11	-0.17 ***	0.039	-0.11
職業 (ref. 農業)												
専門	-0.22	0.18	-0.10	-0.15	0.18	-0.07	-0.24	0.17	-0.11	-0.19	0.175	-0.09
管理	-0.10	0.18	-0.04	-0.03	0.18	-0.01	-0.12	0.18	-0.04	-0.06	0.18	-0.02
事務	-0.09	0.18	-0.05	-0.03	0.18	-0.01	-0.11	0.17	-0.05	-0.06	0.173	-0.03
販売	-0.11	0.18	-0.04	-0.04	0.18	-0.01	-0.12	0.18	-0.04	-0.06	0.179	-0.02
マニュアル	-0.02	0.17	-0.01	0.04	0.18	0.02	-0.02	0.17	-0.01	0.01	0.172	0.01
無職	-0.13	0.18	-0.05	-0.06	0.18	-0.02	-0.15	0.18	-0.06	-0.11	0.178	-0.04
配偶者有無	0.04	0.05	0.02	0.02	0.05	0.01	0.02	0.05	0.01	0.00	0.047	0.00
世帯収入 (対数変換)	-0.04	0.03	-0.04	-0.05	0.03	-0.04	-0.05	0.03	-0.04	-0.05	0.027	-0.04
主観的健康感	0.03	0.02	0.03	0.01	0.02	0.02	-0.01	0.02	-0.01	-0.01	0.02	-0.02
都市規模	0.01	0.02	0.01	0.02	0.02	0.03	0.01	0.02	0.02	0.02	0.015	0.02
競争不安	0.11 ***	0.02	0.14	0.11 ***	0.02	0.13	0.12 ***	0.02	0.15	0.11 ***	0.019	0.14
閉塞感	0.07 ***	0.02	0.09	0.08 ***	0.02	0.10	0.08 ***	0.02	0.10	0.07 ***	0.018	0.09
親しい家族・親族の数	0.02	0.01	0.07	0.00	0.01	0.02	0.01	0.01	0.03	0.03 *	0.01	0.09
親しい人の数	-0.01	0.01	-0.05							-0.02 **	0.006	-0.10
近所：サポート				0.01	0.03	0.01				-0.02	0.028	-0.02
近所：きずな				0.11 ***	0.03	0.13				0.10 ***	0.03	0.12
個別的信頼							0.10 ***	0.03	0.10	0.11 ***	0.025	0.10
一般的信頼							0.15 ***	0.02	0.16	0.13 ***	0.024	0.14
R ²	0.055			0.070			0.094			0.106		
adj. R ²	0.046			0.061			0.085			0.096		
N	1800			1799			1798			1797		

(注1) B：非標準化係数 S.E.：標準誤差 β ：標準化係数

(注2) ***p<0.001 **p<0.01 *p<0.05

最初にモデル1から親しい人の数との関連を確認したところ、権威主義的パーソナリティと親しい人の数の間の関連は統計的に有意ではないことが確認された。

次にモデル2では近所：サポートと近所：きずなとの関連を確認した結果、近所：サポートと権威主義的パーソナリティとの関連は統計的に有意ではなかったが、近所：きずなとの関連は統計的に有意であり、ここから、近所の人は強いきずなで結ばれていると考えるほど、権威主義的パーソナリティが強いことが確認された。

モデル3では一般的信頼と個別的信頼との関連を確認した。その結果、一般的信頼と権威主義的パーソナリティおよび個別的信頼と権威主義的パーソナリティの関連が統計的に有意であることが確認された。ここから、だいていのひとは信頼できると思う人ほど、また、何をするにしても、知らない人より、よく知った人の方が信頼できると思う人ほど権威主義的パーソナリティが強いことが確認された。

最後にモデル4ではモデル1からモデル3までのソーシャル・キャピタルを投入して各々のソーシャル・キャピタルの効果を確認した。その結果、近所：きずなと一般的信頼および個別的信頼はモデル2と3から表れた結果と同じような傾向が見られた。特に親しい家族・親族の数と親しい人の数においてはモデル1では権威主義的パーソナリティとの関連が統計的に有意ではなかったが、モデル4では統計的に有意になった。この結果から、親しい家族・親族の数が多いほど、権威主義的パーソナリティが強く、親しい人の数が多いほど権威主義的パーソナリティが弱いことが確認された。

モデル4で親しい家族・親しい親族の数と権威主義的パーソナリティ、親しい人の数と権威主義的パーソナリティの関連が統計的に有意になった理由として、親しい人の数が高い人の特性について考える必要がある。

表3の相関分析から親しい人の数と近所：きずな、近所：サポート、個別的信頼が正の相関関係があることから、親しい人が多い人であるほど、結束型SCが高いことが分かる。そのため、親しい人の数以外の結束型SCの独立変数を投入することによって、親しい人の数が多い人々の中で結束型SCが多く、権

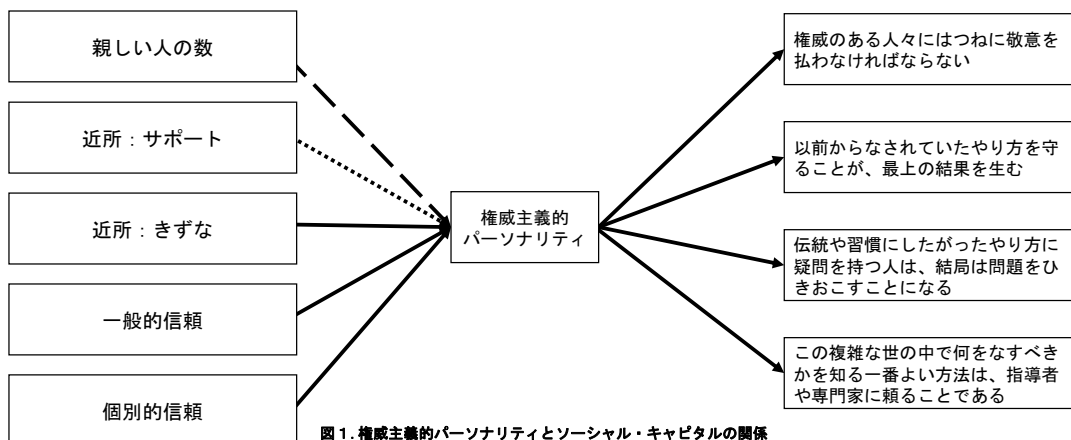


図1. 権威主義的パーソナリティとソーシャル・キャピタルの関係

注）直線：正の関連、点線：無関連、破線：負の関連

威主義的パーソナリティが強い人の効果が奪われ、それによって親しい人が多く、権威主義的パーソナリティが弱い人がより鮮明になったことによる結果と解釈可能であろう。

また、いずれのモデルにおいても統制変数である学歴、世帯収入、競争不安、閉塞感は権威主義的パーソナリティと統計的に有意であり、初等学歴ほど、世帯収入が低いほど、競争不安と閉塞感を感じるほど権威主義的パーソナリティが高いことが確認された。しかし、性別や年齢、職業、配偶者の有無、主観的健康感、都市規模との関連は統計的に有意ではなかった。図1は権威主義的パーソナリティとソーシャル・キャピタルの関係をまとめたものである。

4.4 媒介分析

次の媒介分析では、競争不安と権威主義的パーソナリティの関連における一般的信頼の間接効果を確認した。まず、表6は権威主義的パーソナリティと一般的信頼を従属変数とした際における分析結果である。分析結果から、競争不安は一般的信頼と負の関連があることが確認され、競争不安を感じるほど、一般的

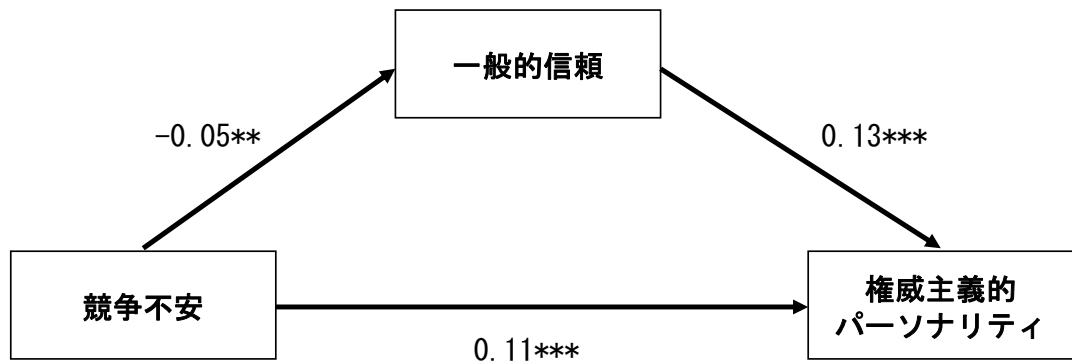
表 6. 重回帰分析

	権威主義的パーソナリティ			一般的信頼			権威主義的パーソナリティ		
	B	S.E.	β	B	S.E.	β	B	S.E.	β
切片	-0.55	0.31		0.01	0.30		-0.55	0.30	
年齢	0.00	0.00	-0.03	0.01 ***	0.00	0.16	0.00 *	0.00	-0.05
性別 (0:男性)	0.03	0.04	0.02	0.06	0.04	0.03	0.02	0.04	0.01
学歴	-0.16 ***	0.04	-0.10	0.09 *	0.04	0.06	-0.17 ***	0.04	-0.11
職業 (ref. 農業)									
専門	-0.16	0.18	-0.07	0.23	0.17	0.10	-0.19	0.17	-0.09
管理	-0.04	0.18	-0.01	0.17	0.18	0.06	-0.06	0.18	-0.02
事務	-0.04	0.17	-0.02	0.13	0.17	0.06	-0.06	0.17	-0.03
販売	-0.05	0.18	-0.02	0.08	0.18	0.03	-0.06	0.18	-0.02
マニュアル	0.03	0.17	0.01	0.08	0.17	0.04	0.01	0.17	0.01
無職	-0.08	0.18	-0.03	0.20	0.17	0.07	-0.11	0.18	-0.04
配偶者有無	0.01	0.05	0.00	0.06	0.05	0.03	0.00	0.05	0.00
世帯収入 (対数変換)	-0.05	0.03	-0.04	0.00	0.03	0.00	-0.05	0.03	-0.04
主観的健康感	0.00	0.02	0.00	0.11 ***	0.02	0.12	-0.01	0.02	-0.02
都市規模	0.02	0.02	0.03	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02
競争不安	0.10 ***	0.02	0.13	-0.05 **	0.02	-0.06	0.11 ***	0.02	0.14
閉塞感	0.07 ***	0.02	0.09	0.00	0.02	0.00	0.07 ***	0.02	0.09
親しい家族・親族の数	0.02 *	0.01	0.08	-0.02	0.01	-0.06	0.02 *	0.01	0.09
親しい人の数	-0.01 *	0.01	-0.09	0.01 *	0.01	0.08	-0.02 **	0.01	-0.10
近所: サポート	-0.01	0.03	-0.01	0.08 **	0.03	0.10	-0.02	0.03	-0.02
近所: きずな	0.12 ***	0.03	0.14	0.11 ***	0.03	0.13	0.10 **	0.03	0.12
個別的信頼	0.14 ***	0.02	0.14	0.29 ***	0.02	0.28	0.10 ***	0.02	0.10
一般的信頼							0.13 ***	0.02	0.14
R ²	0.091			0.221			0.106		
N				1797					

(注1) B: 非標準化係数 S.E.: 標準誤差 β : 標準化係数

(注2) *** $p<0.001$ ** $p<0.01$ * $p<0.05$

信頼が低いことが確認された。次の図2はその三つの変数の関連を示したパス図である。分析結果から間接効果は-0.007で、BootLLCIが-0.013、BootULCIが-0.001であり、統計的に有意であることが示された。以上の結果から、競争不安は一般的信頼を経由して権威主義的パーソナリティを高めるよりは、むしろ権威主義的パーソナリティを弱めることに関連があることが明らかになった。



(注) N=1797 *** $p < 0.001$ ** $p < 0.01$ * $p < 0.05$
 値は非標準化推定値 () の中の値は標準化推定値

BootLLCI: -0.013
 BootULCI: -0.001
 Indirect effect: -0.007

図2 パス図(競争不安・一般的信頼・権威主義的パーソナリティ)

5. 考察

本稿では、権威主義的パーソナリティとソーシャル・キャピタルを問った全国調査データを用いて多変量解析を行い、どのようなソーシャル・キャピタルが権威主義的パーソナリティを強化・緩和させるのかについて検証した。分析結果から第一に、親しい人の数は権威主義的パーソナリティと負の関連があること、第二に、一般的信頼は権威主義的パーソナリティと正の関連があること、第三に、個別的信頼は権威主義的パーソナリティと正の関連があることが示された。

まず、第一は親しい人の数と権威主義的パーソナリティに関する知見である。日本における排外主義研究から外国人との接触頻度が高い人ほど排外主義的態度が弱いことが示されたが、本稿における分析結果によって、排外主義的態度のみならず、権威主義的パーソナリティにおいても人との接触が権威主義的パーソナリティを緩和させる可能性が示唆された。しかし、分析結果から親しい人の数の多い人の中には権威主義的パーソナリティが強い人も、また権威主義的パーソナリティが弱い人も存在しており、親しい人の数が多いことによって本人がもつ権威主義的パーソナリティが弱まったのか、あるいはもともと権威主義的パーソナリティが弱いことにより、多様な価値観をもつ人との交流可能性が高まった結果なのかのどちらが原因なのかについてのさらなる検討が必要であろう。

第二は一般的信頼と権威主義的パーソナリティに関する知見である。先行研究では一般的信頼が排外主義態度を緩和させることが指摘され、親しい人の数と同様、一般的信頼も権威主義的パーソナリティを緩

和させると予測したが、実際のところそうではなく、むしろ一般的信頼が高いほど、権威主義的パーソナリティが高いことが確認された。

そこで問うべきところは、なぜ、日本において一般的信頼は権威主義的パーソナリティと親和性が見られるのかである。吉川（1992）は日本における権威主義的伝統主義が近代社会に特徴的な伝統的権威の喪失という明確な歴史的段階を経過していないため、本来きわめて近代的な概念であるはずの権威主義的パーソナリティが現代日本社会においては伝統的権威に基づいた攻撃・従傾傾向と不可分の関係にあることを指摘する。

先に紹介した吉川の議論を考慮すれば、日本において一般的信頼と権威主義的パーソナリティにおける親和性が見られる原因は伝統的権威の喪失が発生していなかったため、一般的信頼が権威への抵抗と、市民間の連帯に基づいたものではなく、伝統的な権威に基づいているからであると解釈できる。

第三は個別的信頼・近所：きずなに関する知見である。先行研究から指摘された通り、強すぎる結束型SCは結束型SCを共有しないものに対して排他的な態度をとり、本人たちの価値観を他者に要求・強要することが考えられる。本稿における分析結果からも個別的信頼と近所：きずなといった結束型SCと権威主義的パーソナリティの間における正の関連が示されており、結束型SCの危険性が確認された。

第四は競争不安と一般的信頼に関する知見である。競争不安を感じる人ほど、他者を協力の対象より、競争の相手として認識することによって、他者一般に対する一般的信頼が低下することが予想されたが、分析結果からも競争不安を感じるほど、一般的信頼が低い傾向が表れることが確認された。

第五は競争不安と一般的信頼、権威主義的パーソナリティの関連における知見である。先行研究からは競争不安と権威主義的パーソナリティの間の正の関連が指摘され、競争不安は一般的信頼を弱めることによって権威主義的パーソナリティを強めると考えられたが、実際にはそうではなく、競争不安は確かに一般的信頼を弱めるが、一般的信頼と権威主義的パーソナリティは正の関連があることから、競争不安は一般的信頼を弱めるとともに権威主義的パーソナリティを弱めることを示唆する結果が得られた。

日本においては競争不安を感じる人は社会における人一般に対する信頼が低く、その代わりに権威のあるものに依存することによって、権威主義的パーソナリティを強めるよりは、権威主義的パーソナリティも弱まることわかる。それは、第二で述べた通り、日本における一般的信頼は伝統的な権威に基づくものであるため、競争不安を感じるものによる一般的信頼の低下は社会において権威をもつものに対する信頼の低下にまでつながることによる結果と考えられる。

次に、本稿による意義である。1つ目の意義は日本において権威主義的パーソナリティとソーシャル・キャピタルの関連を確認したことである。日本での先行研究では主に社会属性および心理状態と権威主義的パーソナリティの関連が指摘されてきた。本稿では、結束型SCと橋渡しSCのようなソーシャル・キャピタルと権威主義的パーソナリティの関連を確認した。特に橋渡しSCの一般的信頼が権威主義態度を関連があることを示すことによって、橋渡しSCによる否定的な側面を明らかにした。2つ目の意義は競争不安を感じる人であるほど権威主義的パーソナリティが強いが、競争不安は一般的信頼を経由して権威主義的パーソナリティを弱めることを確認したことを確認したことである。具体的には本稿の分析結果か

ら競争不安を感じる人は社会一般に対する信頼を失うことによって、権威主義的パーソナリティを強めるのではなく、むしろ権威主義的パーソナリティを弱めることが確認された。

最後に、本稿における限界である。1つ目の限界として、権威主義的パーソナリティの尺度による限界である。2つ目の限界として、横断データによる分析であるため、因果の方向性が特定できないことである。3つ目の限界は、媒介分析における間接効果の弱さである。ただ、間接効果の弱さにも関わらず、競争不安と一般的信頼、権威主義的パーソナリティにおける新たな知見を発見できたことには意義を見出すことができると考えられる。

付記

本研究はJSPS 科研費JP19H00609の助成を受けて、SSPプロジェクト (<http://ssp.hus.osakau.ac.jp/>) の一環として行われたものである。

This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number JP19H00609, as part of the SSP Project (<http://ssp.hus.osaka-u.ac.jp/>)

文献

- [1] Adorno, T., Frankel-Brunswick, E., Levinson, D., and Sanford, R.N. 1950, *The Authoritarian Personality*, New York: Harper & Row. (1980, 田中義久・矢沢修次郎・小林修一訳「Ⅱ 潜在的な反民主主義的諸傾向の測定」『現代社会学体系 12 権威主義的パーソナリティ』青木書店: 45-131)
- [2] Altemeyer, B, 1981, "3 a suggested conceptualization of right-wing authoritarianism" *Right-Wing Authoritarianism*, Winnipeg: University of Manitoba Press, pp.147-174.
- [3] 濱田国佑、2019、「第2章 若者の従順さはどのようにして生み出されるのか」吉川徹・狭間諒多朗編『分断社会と若者の今』大阪大学出版会: 56-90.
- [4] Harpham, T., 2008, "The Measurement of Community Social Capital Through Surveys," Ichiro Kawachi, ed., *social capital and health*, New York: Springer, pp.51-62.
- [5] Hayes, A. F., 2018, *Introduction to Mediation, Moderation, and Conditional Process Analysis, Second Edition: A Regression-Based Approach (Methodology in the Social Sciences)*, New York: The Guilford Press.
- [6] 伊藤泰郎、2011、「外国人に対する寛容度の規定要因に関する考察」『部落解放研究』17: 85-103.
- [7] 稲葉陽二、2011、「社会関係資本のダークサイド」『ソーシャル・キャピタル入門—孤立から絆へ』中公新書.
- [8] 吉川徹、1992、「社会階層と「自己一指令的」態度の形成」『ソシオロジ』37(1): 45-60.
- [9] 吉川徹、1996、「学校教育の諸条件と青少年の社会的態度形成」『社会学評論』46(4): 428-442.
- [10] 吉川徹、1998、「第五章 職業階層は社会意識の差異化要因か?」『階層・教育と社会意識の形成』ミネルヴァ書房: 103-128.
- [11] 吉川徹、2014、「第6章 伝統一近代主義の静かな退役」『現代日本の「社会の心」』有斐閣: 142-170.
- [12] 金明秀、2015、「日本における排外主義の規定要因- 社会意識論のフレームを用いて -」『フォーラム現代社会学』14: 36-53.
- [13] 田中義久、1998a, 「権威主義」見田宗介・栗原彬・田中義久編『社会学事典』弘文堂: 260.

- [14] 田中義久, 1998b, 「権威主義的パーソナリティ」 見田宗介・栗原彬・田中義久編『社会学事典』弘文堂: 260-261.
- [15] 小林大祐・前田忠彦、2023、「第2章 調査設計」『2022年階層と社会意識全国調査（第2回 SSP 調査）報告書』: 9-13.
- [16] 米良文花、2020、「日本における排外意識の規定要因と構造—ナショナリズム・権威主義と社会関係資本に注目して—」『成形人文研究』第28号: 71-103.
- [17] 直井道子、1986、「直系家族における主婦の権威主義的性格」『社会学評論』: 37(2): 191-203.
- [18] 大槻茂実、2006、「外国人接触と外国人意識—JGSS-2003 データによる接触仮説の再検討—」『日本版 General Social Surveys 研究論文集 [5] JGSS で見た日本人の意識と行動 2』: 149-159.
- [19] Portes, A., 2000, "Social capital: its origins and applications in modern sociology," Erric L. Lesser, ed., In *Knowledge and social capital: Foundations and Applications*. Newton: Butterworth-Heinemann, pp. 43-68.
- [20] 敷島千鶴、2004、「権威主義・保守主義的態度伝達に関する実証研究の概観—社会学・心理学、そして行動遺伝学的立場あら—」『社会学研究科紀要』59: 37-46.
- [21] 辻大介、2008、「インターネットにおける「右傾化」現象に関する実証研究 調査結果概要報告書」日本証券奨学財団研究調査助成金報告書.
- [22] 渡辺健太郎、2017、「文系学部卒男性がもたらす若年層の権威主義化」『年報人間科学』38: 139-157.

Authoritarian personalities and social capitals in contemporary Japanese society : What types of social capital are associated with high or low authoritarian personalities?

Hwang CHOE

Abstract:

The purpose of this paper is to investigate the relationship between social capital and authoritarian personalities in contemporary Japan. Previous researchers have identified factors such as education, occupation, and family as influencing authoritarian personalities, but research on the relationship with social capital remains limited. Therefore, for this paper, the author uses nationwide survey data and conducts multivariate analysis (factor analysis, multiple regression analysis, and mediation analysis) to examine the relationships between two types of social capital—bonding and bridging—and authoritarian personalities. The results confirm that having more close acquaintances is negatively associated with authoritarian personalities, while greater neighborhood cohesion, general trust, and particular trust are positively associated with authoritarian personalities. Furthermore, mediation analysis is conducted to examine the indirect effect of general trust on authoritarian personalities through competition anxiety and reveals that general trust has a negative indirect effect. This paper's findings demonstrate that individuals with more bonding social capital tend to have stronger authoritarian personalities. Particularly in the case of bridging social capital, having more close acquaintances weakens authoritarian personalities, but more general trust strengthens authoritarian personalities, indicating diversity in the relationship between bridging social capital and authoritarian personalities. In addition, the study confirms the relationships among competition anxiety, general trust, and authoritarian personalities: Competition anxiety decreases general trust, which in turn reduces authoritarian personalities. This provides insights into the tripartite relationship in Japan.

Key Words : Authoritarian Personality, Social Capital, Anxiety about Competing with Others, Multivariable Analysis